

# 『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年五月～十二月分）

入口 敦志、江口 文恵、田草川みずき  
深澤 希望、柳瀬 千穂、山吉 頌平  
竹本 幹夫

本稿は、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫所蔵の、前田

綱紀（初名綱利・天和三年末に改名。本稿では綱紀で統一表記）の小姓であった葛巻昌興の、延宝～元禄期にわたる私的な役務日記の中から、貞享三年度分後半（同年分は前半が一月～四月、後半が五月以降年末までで各一冊の計二冊からなる）を対象として、能楽記事を中心とする学芸等に関わる記事を抜き出し、解説したものである。今回分は、徳川幕府との外交上の要請から、数日ごとに能を催す加賀藩の様子が活写される。

本稿は二一世紀COE事業・グローバルCOE事業以来継続してきた加賀藩研究会の年次成果の一部として、『葛巻昌興日記』を『演劇映像研究2008』『演劇映像研究2010』『演劇研究』37～41号に連載して来た。掲載をご許可頂いた金沢市立玉川図書館近世史料館に深甚の謝意を表する。

## 【凡例】

- 一、本文の掲出にあたっては、極力原文の姿を生かすことに努めたが、読みやすさの便を考え、句読点・濁点を施し、漢字は原則的に新字体に改めた。
- 一、助詞の小書や欠字札の空格などは原文のままとした。後者については、原文に欠字札が取られていない部分も散見する。それらはそのままにしたため、本文表記上やや不統一が生じた部分がある。
- 一、本文中、割り注の部分は極力その通りとし、葛巻昌興本人により補入されたと思われる脚注的な小字注記は（ ）で括り、示した。
- 一、虫損等による判読不能部分は字数分を□もしくは $\square$ で示し、文字の存在を想定した場合は $\square$ のごとく、当該文字を□で囲んだ。
- 一、各記事の掲出に当たっては、【 】で掲出記事の年月日を

小見出しとして掲げ、その次に本文、さらに解説の順で記述した。

一、本稿執筆にあたっては、入口・竹本の指導の下で各メンバーが翻刻・解説を担当し、さらに入口・竹本がこれを校閲して内容の統一を図っている。

### 【貞享三年五月一日】

一日 天晴。(中略)

今朝奥野小隼人、青山織部、成瀬左京、山崎主税途出。且又今昼伴八矢、同数馬発出。

宝生九郎儀、今度御扶持被下ニ付今日及御礼。野村与三兵衛披露之。御舞扇二本進献<sup>四</sup>、則与三兵衛持出直ニ披露<sup>五</sup>、於表御居間也。

就封のために先遣の人数が国許へと次々に出発する慌ただしさの中、宝生流の家元である宝生九郎友春（一六五八―一七二八）が、前田家より扶持を賜わった御礼言上のために参上したことを記す。友春は綱吉・家宣・家継・吉宗の四代の將軍に仕え、また「加賀宝生」の基礎を作ったことでも知られる。

### 【貞享三年五月三日】

三日 天快晴。申后刻雷発声。急雨頓而属晴。延寿院御見舞、於大書院御対顔。其間ニ宝生九郎、同政之佑、次一曾六郎左衛門、桐谷藤左衛門御目見。(後略)

綱紀の帰封を翌日に控え、延寿院が挨拶に訪れた合間を縫って、

宝生九郎・その息政之丞（原文政之佑。佑は尉・丞と同意）以下、笛方一噌六郎左衛門、地謡方桐谷藤左衛門らの座中役者が参り、御目見を許されたこと。この記事の後には、夜前昌興らの小姓が道中勤仕を命じられたこと、夕刻綱紀が暇乞いのために参集した江戸詰の重臣らと大書院で対面したこと、及び昌興が知友菊池武康より送別の和歌一首を贈られたことなどが見える。

### 【貞享三年五月五日】

五日 天晴。五時過比 御出被遊。御昼休熊谷。御旅泊本庄。

(中略) 熊谷寺江参詣。是熊谷次郎直実入道蓮生法師之旧跡也。請寺僧而蓮生之幕并遺誠・系図覽之。但系図者松平大膳大夫殿家来熊谷何某近年注書之由也。幕者如常、五野之白布也。紋ハ紺ニてはやと鳩也。(寺僧はやと云也。紋之跡ハ凡如图也。(图アリ・後掲) 中は蕪子のことく也。此图ハ悪敷也。) 幕ノ紋五野に懸て付之。はやノ紋ノ数五也。其間ニ鳩有之。てなわハ三つくり也。色ハ是モ共ニ白地之布也。系図も為考少々抄出之。追而左ニ可記置也。石堂も有之。但近年之建立也。蓮生法師と彫付有之。(以下白紙一丁半を隔て別記事)



加賀への帰国の道中の日記。蓮生山熊谷寺は、現在の埼玉県熊谷

市に現存する浄土宗の寺院。熊谷直実（蓮生）の往生の地に建てられたとの由緒を持ち、幡随意上人によって中興された。ここでは、寺宝として、熊谷家の紋、「寓生<sup>ほや</sup>に鳩」の入った幕や、遺誠、系図の伝来を示す。「ほや」はヤドリギの古名。天保十一年成立の『忍

名所図会 増補』巻之四（埼玉県立図書館蔵、同デジタルライブラリーにて閲覧）には、「蓮生山熊谷寺」の項があり、「縁起曰」として縁起を引用するが、そこにも「石橋山の合戦ニハ臥木隠れの恩賞として鳶に鳩の紋附たる幕右大将頼朝公より拝領す」とあるほか、「当山什宝」として、「幕（石橋山の功名に仍て頼朝公より拝領す）」、「子孫置状」（縮図として全文掲載）、「熊谷家系」を掲げるが、これらと同一のものを指すか。ただし鳶とほやを混同している点には疑問が残る。なお、当寺院の幕は代表的な宝物であつたらしく、『和漢三才図会』巻六十七「武蔵国」、熊谷寺の記事にも、「直実所持、白旗」が什物の一つとして挙げられている。「系図も為考少々抄出之」とあるから、昌興は、勉強のためにこれを書き取ったのだろう。系図は、「松平大膳大夫殿家来熊谷何某」によるものというが、ここでいう「松平大膳大夫殿」は萩藩主毛利綱広と考えられ、同藩には熊谷直実の末裔が仕えていた。同藩士の熊谷氏の者が奉納したのであろう。「追而左ニ可記置也」とあるが、次の一丁半は空白のままであり、追記はされないままとなっている。

#### 【貞享三年五月八日】

八日 天快晴。諏方大祝頼隆江被遣 御直書。則右之使者ニ被遣也。

御書之趣（そらにて書之。若少々相違も可有候歟。）  
今度御柱祭礼執行付而被差越使者、御玉会并兩種贈給之候。芳情之至、令祝着候。不宣謹言。

加賀中將

五月八日

御諱御判

諏方大祝殿 御宿所

彼社縁起旧記等有之哉、可相尋旨被 仰出。使者ニ御宿亭主を以尋之処、乱国之時分焼失、旧記等無之由。只信玄之判物一通相持候由也。且又諏方頼茂之筋候哉御尋候処、頼茂筋にて系図者昔より伝来之系図于今有之由申之。大祝 御玉会 御柱祭礼 此三品唱御尋之処、使者右之通申也。（後略）

綱紀が諏方頼隆に出した直状を、記憶に拠りながら転記する。頼隆は諏訪上社の大祝であつた人物。ここで「縁起旧記等」が「乱国之時分焼失」といっているのは、織田信長による侵攻を指しており、頼隆が延宝七年（一六七九）に、幕府寺社奉行酒井忠勝に提出した書上の控えである『諏訪上社社例記』にも、「当社草創歴年遼遠而未分明」。加之天正拾年三月、織田信長甲州乱入之節、神社宝蔵悉回祿、縁起到「斯時焼失」（『神道大系』による）と記されている。「諏方頼隆」とは、武田晴信に滅ぼされた諏訪頼重を指すか。「御玉会」は、嘉禎四年成立の『諏訪上社服忌令』によれば、「大明神ノ御判形也」とある（『神道大系』）。

#### 【貞享三年五月十六日】

十六日 小雨降。及晚景雨晴。今日辰后剋、御恭様御登城被遊。

御迎ニ齋藤長七兵衛被遣之也。且又為御土産、今度御拝領之白銀三十枚、御拾五并八講布三十疋、二十一代集卷頭和歌御手鑑一帖公卿衆新筆、寄合書、白鳥一箱被進之。稻垣三郎兵衛安根為御使。(後略)

金沢帰城後の記事。綱紀養女、恭姫が登城。江戸土産に公卿らの筆による二十一代集卷頭和歌の手本帖などを与えている。

#### 【貞享三年五月二十四日】

廿四日 天陰。折々小雨洒。(中略) 今夕於御居間御次謡被仰付。所謂半部・六浦・芦刈・大仏供養等也。御徒之内渡辺甚五右衛門、御算用者齋藤善助、御細工之者、太田清兵衛、中村助大夫、且又波吉左平次、竹中甚助等也。手拍子ハ御細工之者、加藤勘左衛門。小鼓ハ堺屋庄左衛門也。(後略)

〈半部・六浦・芦刈・大仏供養〉の謡が城中綱紀居室の隣室において執り行われたことを記す記事。ここで「御細工之者」から多くの者が集められているのは、綱紀の政策により、細工所所属の者の一部に、シテ方を除く能楽諸芸を兼ねて修めさせていたからである(『石川県史 第二編』六三〇頁等)。

#### 【貞享三年五月二十六日】

廿六日 今夜又昨日之通謡被 仰付。但右之外、加藤市佑、同惣太夫、金子助三郎罷出也。波吉左平次儀、昨日も兼而寛候謡度々失念。其上京都迄稽古ニ被遣江戸へも罷越候処、仕廻一向不調法ニ付、家業を不相励無沙汰之仕合候条、御目通へ出申

間敷旨、町奉行中へ可申渡旨、玄蕃、兵部へ被 仰出候由也。

「又昨日之通」とあるが、一昨日の誤りだろう。二十四日にも名が見える波吉左平次は金沢在住の町役者。ここは五世の信興。「波吉家由緒」によれば、万治三年生、延宝三年に綱紀に召され宝永六年没。信興自身は金春流で、同家が宝生流に改めるのは、息子の信重の代からであるという(『石川県史 第二編』所収、六二八〜六二九頁)。前回召し出された折に謡を度々忘れて絶句し、また京都に稽古のために派遣され、江戸にも参っているのに、能が下手であるというので、綱紀の勘気に触れ、出入り禁止を申し渡された。京都では竹田平四郎に、江戸では宝生大夫に、稽古を受けたのであろう。すなわち実際には信興の代にすでに宝生流に転流していたのではなからうか。

#### 【貞享三年六月四日条】

四日 天陰、辰下刻比より晴。坂井三郎兵衛、江戸より帰参ニ付 御目見。伊予披露之。右畢而御射手十四人巻藁被 仰付也。昨日之通、立前とつくはひと也。川縁市佑、松原七右衛門、毛利半平、松崎半七、矢嶋作平、永井又三郎、富田助之進、毛利六右衛門、久保久米之助等也。御腰障子際ニ前田備前、津田玄蕃、奥村兵部、多賀新左衛門同公。

及晩、素謡被 仰付。於御次之間也。

甚助

梅 枝

善 助

市佑手拍子  
惣 太 夫

五郎兵衛

善助  
六浦

清兵衛  
市 佑前  
庄左衛門

円 七  
五郎兵衛

右二番共ニ次第より也。

前日(三日)に引き続きの弓術披露の後、夜には素謡(囃子付き)が行われた記事。

巻藁とは、「藁を固く巻き三ヶ所を縄で締めた筒状のもので(中略)横にして巻藁台に乗せ、その小口を射るのが一般的な使い方」(入江康平『堂射―武道における歴史と思想』第一書房、二〇一一年)であるという。「つくはひ」は「蹲・蹲踞(つくばひ)」という弓術の坐射の名称。一方の立前は立射の意か。前掲の入江氏は著書中で、弓術の的前・巻藁前などの「前」は、「目的の相違によるそれぞれの射の『技』とか『やり方』といった意味であろうか」と記している。

素謡二番は〈梅枝〉と〈六浦〉で、どちらも「次第」からの短縮型。素謡とはいえ囃子が付き、大鼓の加藤市佑(市丞のこと。前出。以下同様)は、二曲とも楽器を用いず手拍子で勤めている。〈梅枝〉のシテは新藤流の竹中甚助、〈六浦〉のシテとワキは、こうした番組に度々登場している家臣の斎藤善助と太田清兵衛か。囃子方は、笛・京屋五郎兵衛、小鼓・加藤惣大夫、太鼓・北村屋円七。皆金沢の役者である。庄左衛門は五月廿四日条に見える堺屋庄左衛門。

### 【貞享三年六月八日・十日条】

八日 天晴。今夕、御恭様御登城也。御迎ニ稲垣八郎左衛門被遣之。明日明後日之内御囃子可被 仰付之条可存其催之旨、玄蕃・兵部江被 仰出也。

十日 天快晴。今日七時已前より、於御居間御囃子被 仰付之。御恭様御簾之間則御居間也。役者共ハ御次御縁ニ伺公。御勝手ノ方ニ玄蕃、兵部、新左衛門并稲垣三郎兵衛等伺公。表之方御杉戸口ニ町御奉行里見七左衛門、岡田十左衛門、内一人宛伺公。

八日に恭姫(綱紀養女)が金沢城を訪れたため、綱紀が明日か明後日の囃子を所望し、翌々日の十日午後五時から、御居間書院にて披露された。恭姫は御居間書院の御簾の内で鑑賞するという内輪の催し。役者の名はない。一丁半の白紙が続くが番組記入のためだったか。

### 【貞享三年六月十一日条】

十一日 今日七半時過、御恭様御帰被遊。今晚於御居間書院、御つば折ニて御仕舞被遊。当番ニて有合候ニ付、松田彦左衛門、千秋半右衛門、磯松三郎左衛門等も被 召出。松田ハ小つづみ、千秋、磯松ハ謡被仰付候由。

恭姫が午後五時頃に金沢城を辞した後、綱紀は御居間書院にて仕舞を舞った。ただし、曲名の記載はなし。

「つば折(壺折)」とは、小袖などの着物の襟をつばめるようにたくし上げて帯に挟み、足さばきを良くする着方を指す。当番でたまに居合わせた松田彦左衛門・千秋半右衛門・磯松三郎左衛門が召し出され、小鼓と謡を勤めた。同年閏三月の記事『演劇研究』第41号)には、綱紀が家臣に次々と能の稽古を命じる記述がみられるなど、綱紀の周辺で、能の囃子や謡の素養が必須となってきた

ことが窺える。

### 【貞享三年六月二十二日条】

廿二日 朝之内天陰、昼晴。昨晚諸橋市十郎從江戸帰參云々。

今日七時已前歟、於御居間梅枝之謡并仕廻被 仰付也。

御手役者の諸橋市十郎が、前日の夜に江戸から帰参したため、綱紀は御居間書院での「梅枝」の謡と仕舞を命じた。「梅枝」は、同月四日にも素謡（囃子付き）で演じられている。

### 【貞享三年七月一日条】

一日 天晴。（中略）

今夕、御恭様御慰ニ平家被 仰付也。七時前御居間書院へ御出也。尤此所ニ被垂御簾也。

延喜聖代中音

祝言

竹生島詣

紅葉

二度之懸

木曾願書

（奥村壱岐扶持位置也）

竹森檢校

同人

成都

同人

竹森  
（成都）

浪吉左平次儀、去比より蟄居被 仰付置候処、昨日御免許之義被 仰出云々。但、昨日御囃子之時分又以「失念等」不調法之仕合有之候で、急度不屈ニ可被 仰付候由云々。（後略）

貞享二年に家臣、長時連に嫁した綱紀の養女、恭姫のために平曲が演奏された記録。恭姫は結婚後も度々金沢城を訪れたこと、観能

を好んだことが本日記を通読すると分かるが、平曲にも関心があったようである。本日記の貞享二年正月二日条に、能役者と共に檢校が新年の挨拶をする様子が記されているが（『演劇研究』第39号38頁）、加賀藩で複人数扶持されていた檢校・座頭・勾当についての記録の事例は少なく、享保頃を境に平曲の伝承は断絶したらしい。右の記事は「成都」が奥村壱岐に扶持されていたことが分かる点など貴重な記述と言えるだろう。

続いて、五月に、謡を失念した等々の由で御目通りを控えるよう通達されていた波吉左平次が、ようやく蟄居を解かれたものの、その直後にまたも失敗した。「昨日御囃子」の詳細については言及がなく不明だが、厳しく叱責されるであろう旨が記されている。

### 【貞享三年七月二日条】

二日 天晴晚景急雨。今日、御恭様よりみたまの御祝儀御進上也。所謂菱折敷三百枚、瓜一籠、匏一折也。水野次郎左衛門為御使者。津田玄蕃取次之、御返答同申次之。且水野ニ時服二被下之也。

今日八時過、御恭様御表へ御出被遊也。御囃子被 仰付也。則右被進品々御祝也。仍、安房、佐渡、壱岐、伊与并筑後、備前、玄蕃、兵部、与十郎、新左衛門儀も右御祝被下之。且又御囃子可承候旨被 仰出也。年寄中へハ玄蕃伝御旨。筑後以下へハ永井伝七郎申聞也。

御居間書院御次之間、三四ヶ間ニ御簾ヲ被垂也。年寄中以下ハ御近習諸役人等相詰向之間より其次西之方ノ間へかけて也。則

此所にて御料理も被下也。給仕ハ御表小将并御大小将等也。御囃子七半過相済。御恭様六過御奥へ被為入也。(中略)

御囃子

左平次

養老

甚助

善七

圓七  
吉村久兵衛

市十郎舞

井筒

四郎兵衛

加藤市佑  
同惣大夫

山本作左衛門

甚助

錦木

加藤勘左衛門  
庄左衛門

五郎兵衛

御中入

市十郎舞

難波

伝七

加藤一佑  
同惣大夫

四郎兵衛  
五郎兵衛

老松のかたり

甚助

左平次舞

はせを

加藤勘左衛門  
同惣大夫

山本作左衛門

江口

市十郎

宋女

左平次

桜川

市十郎

海士

左平次

実盛

市十郎

右五番、謡斗にて仕舞

市十郎舞

靄亀

善七  
庄左衛門

四郎兵衛  
久兵衛

恭姫の、養父綱紀への「みたまの御祝儀」、すなわち盆に存命の親をもてなす生御魂の祝儀の贈り物への返礼の囃子会の記録。居囃子(養老・錦木)、シテの名に「舞」と注記された舞囃子形式の

〈井筒・難波・芭蕉・鶴亀〉の他、「謡斗にて仕舞」、つまり現在仕舞と称する形式の上演があったことが分かる。前日に再度の謹慎が予想されていた(波吉)左平次だが、この番組には名前が頻出する。問題はあったものの欠くことのできない人材だったのだろう。

### 【貞享三年七月四日条】

四日 天陰。(中略)

今日江戸より御飛脚到来。去廿七日、

公方様御能被遊、大小名、諸番頭、諸物頭、御書院番衆、御小將衆、新番之組頭等にいたるまで拝見被仰付云々。

御能組

高砂

牧野美濃守

ワキ 平岡信濃守

頼政

同人

同 富田大宇

上 邯鄲

春藤 權七

上 舟弁慶

同 六郎次郎

桜川

斎藤飛騨守

山本忠兵衛

善知鳥

阿部豊後守

山本忠兵衛

上 乱

同 加藤源太左衛門

原本では桜川のシテははじめ阿部豊後守と書かれ、後から正しくは斎藤飛騨守であることが注記されたよう、斎藤・阿部の名前は曲名より右にずれた位置に書かれ、線で結ばれている。江戸より飛脚が到来し、六月二十七日に江戸城で催された能

の詳細を伝えた。国元にいる間も江戸城での催能の番組や規模、参加者の顔ぶれなどの情報を把握することは、綱紀にとって必要だったのだろう。

【貞享三年七月十三日条】

十三日 陰。昼以後雨降。又、陰晴不究。

今日、「予」巳中刻より之当番也。巳刻以前、詣宝集寺。是、今日得寿院殿御忌日、且又、去年為追慕とて写紺紙金泥之心経、豫今日可備牌前之旨、相存候条、其宿意をも為果也。則彼一卷令好便進呈之者也。

其跋、丹直清ニ草稿を誂、今朝予令染筆了。其文章、

右一卷、依去年丁

(以下、数行分の空白の後、十四日の記事になる)

昨年、得寿院殿供養追慕のため、本日記の筆者昌興は、金沢の浅野川下流の堀川地区にあった宝集寺に般若心経を奉納した。その跋文に丹直清こと室鳩巢に文案の執筆を依頼し、この日の朝、経巻の末に清書した旨を記す。残念ながらその跋文の引用は途切れているが、両者の交流について伝える記事のひとつである。

【貞享三年七月二十日条】

廿日 天陰。今晚於御居間御稽古之御能有之。但御つば折也。

上 脇ハ謡斗也 加藤勘左衛門  
ばせを 下同断 松田彦左衛門

山本 長九郎

百 萬 浪吉左平次

上 びばり山

加藤勘左衛門  
同 惣大夫 藤本太左衛門  
山本 長九郎

上 ゆや

加藤勘左衛門  
松田彦左衛門 長九郎

ぬ え 浪吉左平次

加藤勘左衛門  
同 惣大夫 戸田助助  
長九郎

宝生大夫弟子、松井十右衛門事、御当地へ可被 召寄旨、於江戸宝生へ被 仰出者也。依之今日藤本太左衛門同道にて参着。

且又山本長九郎事、先比依 召四五日以前京都より罷下也。竹田平四郎ハ八月中旬可罷下旨、江戸にて被 仰出候へとも、九月上旬可罷下旨被 仰出之由也。

今日、白書院ニ之間御舞台被 仰下候也。明日可令出来之由、御作事奉行申之。予奉而、今朝申渡ス所也。

今日、江戸より御飛脚到来ス。此次而ニ申来ハ春藤ハ郎次郎事、御次番へ被 召出、名ヲ斎藤新八郎と相改之由也。

綱紀は壺折、ワキは謡のみという簡略な形で行われた稽古能の記録の後、各地から役者が呼び寄せられた旨が記される。宝生大夫の弟子、松井十右衛門（十左衛門カ）が江戸から召され、稽古能の番組に見える藤本太左衛門が同道し、到着した旨を記す。金沢の能が宝生流に移行する様子を示す一事例だろう。松井は正式の拝謁は八月一日ながら、この稽古能に立ち会った可能性が高いだろう。藤本と同じく稽古能の番組に名前が見える山本長九郎は、京都から四、五日前に到着したという。竹田平四郎は江戸では八月中旬に呼び寄



せられる予定だったが、九月上旬に延期になった。その後、白書院二之間舞台の完成が作事奉行より報じられる。最後に江戸から春藤六郎次郎正尚が江戸城に御次番として召し出され、斎藤新八郎と改名したという報告があった旨が記される。当時たびたび行われ混乱を招いていた、能役者の士分登用の一事例。

### 【貞享三年七月二十三日条】

廿三日 天晴。津田太郎兵衛、夜前京都より帰着。頃年、御書物才覚のため、打続在京云々。(後略)

綱紀が古典籍調査・買い付けのために上方に派遣していた書物才覚人の津田太郎兵衛が京都から帰着したことを伝える。国会図書館に同人の貞享元年～三年四月頃までの業務記録『書籍搜索記』が所蔵、デジタルコレクションに公開されている。

### 【貞享三年七月二十五日条】

廿五日 雨降。夜半比暫風烈。(中略) 来朔日御能之時分、六浦・海士之脇可被 仰付旨、被 仰出之、有賀甚六郎申渡之。

八月一日の稽古能の〈六浦・海士〉のワキに、筆者が指名されたことが記される。

### 【貞享三年七月二十六日条】

廿六日 雨降。(中略) 今夕、白書院にて六浦・桜川、御つば折ニ而被遊也。大鼓ハ手拍子也。(竹中甚助事、来朔日桜川御相手ニ 被仰付故、則今日も被 召出也。)(後略)

綱紀が壺折で〈六浦・桜川〉の稽古を行ったことを記す。筆者は〈桜川〉の稽古の相手に指名されている。演目から、八月一日の稽古能に備えた稽古であると考えられる。

### 【貞享三年八月一日条】

一日 天晴。四時過大広間下段へ御出座。式日之通 御目見、并御馬廻二組 御目見。且又三井寺法華院被 拝謁云々。(今般御普請ニ付、白書院 御居間也。其上御舞台にも被 仰付。依之、先年御居間御普請之刻之通、大広間にて御目見可被 仰付旨、一昨日被 仰出也。)

今日之事、尤何茂染帷子也。又大広間にて御目見之刻、御縁通にも罷出云々。

(絵図あり・次掲)



(注記) 御三方いつものごとく両方ニ有之。

御上段

竹之間 御弓庭

御白洲

今日八時過より御稽古之御能有之。

ものであろう。稽古能は能七番、狂言二番。うち綱紀は六浦・桜

七月二十日条に見える宝生九郎弟子の松井十右衛門が江戸より金沢へ赴き、稽古能の前にお目見えの挨拶を仰せつけられている。松井は『元禄雜記』(21 COE・グローバルCOE紀要で紹介)に見える、ツレ役者の松井十左衛門のことであろう。貞享三年記事では十右衛門とあるが、正しくは十左衛門である。松井十左衛門は、宝生九郎の弟子で江戸に住ながら、幕府扶持の宝生座には属していない役者である。当日の稽古能では最後の《具服》のシテを勤めており、この時期から加賀藩への出入りが始まったと考えられる。

三輪	生駒右近	甚助	勘左衛門 金子久兵衛	圓七 長九郎
千鳥		伊右衛門	次郎三郎 庄左衛門	五郎兵衛
兼平	左平次	甚左衛門		

上  
芭蕉 甚助 葛巻平次郎 惣大夫 長九郎  
杜若 左平次 甚左衛門 次郎三郎 太左衛門  
上 雲雀山 葛巻仲四郎 勘左衛門 五郎兵衛  
あはち柿 旦兵衛 庄左衛門 山東作左衛門  
鍾馗 左平次 甚助 二郎三郎 圓七  
左平次 惣大夫 五郎兵衛

今日御新宅建初之。尤不及柱建等之儀也。(後略)

稽古能の記事。前出の八月一日条と同じく、白書院を座敷舞台にして行われた。綱紀自身は「芭蕉・雲雀山」を舞う。一日条と同じく、家臣・御細工人・御手役者・町役者らが助演者として出勤する。狂言の「あはち柿」は、見慣れない演目名だが、恐らく「昆布柿」のことであろう。「合柿(あわせがき)」の誤記の可能性も考えたが、三文字目が明らかに「ち」と読めることから、右の如く翻刻した。「昆布柿」は、丹波の柿を献上する百姓と、淡路の昆布を献上する百姓が登場する作品で、「淡路柿」という通称が存在したのかもしれない。なお同文庫蔵『両御神事古今御番組』寛文十二年四月分に「あわち笠」なる狂言が見える。

### 【貞享三年八月十日条】

十日 天快晴。今日八時過より先日之通御能有之。  
養老 左平次 甚左衛門  
上 俊成忠則 仲四郎

上 栗田口 馬場 清兵衛 (頃日從江戸来)  
半部 甚助  
野宮 新左衛門 甚左衛門  
葵上 右近 甚助  
鶴 左平次 清兵衛  
上海士 仲四郎

六半過相濟、御能之間玄蕃伺公。并町奉行兩人之内宅人宛、并御横目之輩、且又当番御近習伺公之面々等拝見之。

能の催しの記事。一日・六日条と同様白書院の御居間で行った模様である。前出の二件の記事と同じく稽古能であろう。能七番と狂言一番。うち綱紀が「俊成忠度・半部・海士」の三番を舞う。狂言「栗田口」を演じた馬場清兵衛には「頃日從江戸来」と注記がある。21世紀COE紀要IX(二〇〇七年三月)「前田綱紀時代の加賀藩資料に見える能楽」で紹介した『元禄雜記』1-3等に見える狂言役者馬場弥市郎の縁者か。

### 【貞享三年八月廿五日条】

廿五日 天晴。(中略) 今日御能可被遊旨、先日被 仰出、御能組も相極候処、少々御痛有之ニ付、御延引云々。

能の催し延期の記事。前田綱紀が能を行うことを決めて家臣に命じ、演目も決まっていたが、綱紀に痛みがあるとの理由で延期となった。綱紀自身が舞うつもりであったことから、公式な催しではなく、同月一日・六日・十日条の如き稽古能であろうと推せられる。

【貞享三年八月廿六日条】

廿六日 雨降。御居間前御舞台頃日出来之處、不應 御意所  
有之ニ付、こぼし可申旨被 仰出。一昨日急ニ打崩し昨日改而  
建之。大概出来也。(後略)

普請中であつた御居間の前に建てた能舞台を、主君の綱紀が意に  
沿わないという理由で、壊すよう命じている。二日前の二十四日に  
急に言い出したようで、ほぼ出来上がっていたものを、同日に崩し  
て翌日には建て直すことになった。

【貞享三年八月廿八日条】

廿八日 明方之比より雷雨甚。御舞台出来。松竹絵狩野春悦・  
同即誉画之。

前出記事同月二十六日条に見える如く、一度出来た能舞台を壊し  
て建て直していたが、それが再度完成した記事。二十四日に壊して  
から数日で出来上がっているの、改築は部分的な修正程度か。鏡  
板の松と竹を狩野春悦と狩野即誉が描いた。狩野春悦・即誉は、と  
もに幕府の奥絵師で後に加賀藩のお抱えとなつた狩野友益氏信の子  
息で、春悦重信・即誉種信兄弟である。春悦は早逝したが、即誉は  
加賀藩の御用絵師を長く務めたことから「加賀の即誉」とも呼ばれ、  
のちには奥絵師として幕府に仕え、芝愛右下狩野家の祖となつた  
『日本画家辞典 人名篇』『美術家人名事典』。

なお、演劇博物館グロバールCOE紀要『演劇映像学2010』  
第4集(二〇一一年三月)一六三頁で紹介した延宝八年八月十日条  
(金沢での記事)で、正倉院の三倉宝物帳絵図の書写を命じられた

狩野姓の絵師の名が難読であつた。当該稿発表時には暫定的に「即  
絵図は狩野寿桂へ写被仰付候」と翻訳し、考察で「寿桂」「春悦」  
「寿悦」なども読めるが、狩野姓の絵師に同名を見いだせなかつ  
た」としたが、これは候補に挙げたうちの「春悦」で、本記事貞享  
三年八月二十八日条に見える狩野春悦重信であろう。貞享三年正月  
一日条にも見えており(本誌40号2頁)、少なくとも貞享三年記事  
等から狩野春悦なる絵師が存在し、加賀藩前田家にゆかりのある人  
物であることも判明した。春悦が延宝頃から加賀藩御用絵師として  
活動していた可能性は高からう。

【貞享三年九月一日条】

一日 雨降。(中略)老中江以玄蕃・兵部被 仰出者、当春  
公方様御自身之御能御拝見被遊、其以後御懇之上意候也。於  
御前ニも初而御能被遊候ニ付、御祝被成。於御城も追付御能被  
遊、何も江御見せ可被遊と被 思召候処、暑氣之時分、其上拍  
子方之輩も御当地ニ有合不申ニ付、御延引と成候。然者来十日、  
御能御興行被遊、御料理をも可被下候。備後、九郎左衛門、  
左衛門儀も可被 召加之、此旨、老中より可被相達之由云々。  
且又、筑後、備前等六人之面々、并本多主殿、同嫡子、暨伊与  
嫡子も拝見可被 仰付云々。其外公事場御奉行等人持之内役儀  
有之輩、并組頭中拝見可被 仰付云々。

明日御能ニ付、御座所并拝見之輩之座圍等被 仰付也。玄蕃、  
兵部、新左衛門并御近習頭中等奉之。  
明日之御能之儀、老中并筑後、筑前已下もとても罷出可有之候

条、十日迄ハ待遠ニも可存之間、拝見をも仕間敷哉之趣ニ、新左衛門を以被 仰出候由也。且又、御能初御使、兵部可勤之旨被 仰出也。

同年春の江戸参府中、綱紀にとって大きな出来事があった。閏三月二十一日に江戸城にて將軍徳川綱吉の能を拝見し、さらに四月三日には江戸城での演能に綱紀自身が出演したのである(『演劇研究』第41号、参照)。国元において祝賀能を興行したいとの考えであったが、暑さ厳しき最中かつ囃子方が揃わないことから延期となっていた。その日取りが十日と決定し、加賀八家の面々と役儀の輩の見物が申し渡された。四月末、京都へ戻る竹田平四郎広富に、秋頃役者を連れて金沢へ下るよう命じており、その到着の目処が立ったことで日取りが決定となったのであろうか。

また、明日も能があり、老中と横山筑後・筑前らの拝見が許され、多賀新左衛門によって通達された。御能初めの御使は、奥村兵部が勤めることとなった。

【貞享三年九月二日条】

二日 雨降。已下刻より御能初。先、召兵部(長袴着之)。御能可初之旨被 仰出（長袴着之）。是より前、老中等御目見有之。但老中着座之間之襖障子、新左衛門明之。其所へ 御出被遊也。藤永之時分、御菓子被召上之。則其御菓子老中以下物頭以上へも於其座被下之。西后刻、御能相済。又如昼、老中 御目見。且又、頭分其輩同御目見也。

今日御樂屋奉行、永井伝七郎、小泉勘十郎。且又、老中等へ被

下御料理之事、平岡五左衛門、藤田八郎兵衛奉仕之。

御能組

翁	千歳	清兵衛	
老松	左平次	万右衛門	勘左衛門
麻生		金右衛門	二右兵衛
田村	陸佑	甚左衛門	二右三郎
いくる		吉兵衛	庄左衛門
六浦	与平次	孫兵衛	大左衛門
御中人		二右兵衛	長九郎
龍田	右近	甚助	市亟
桜川		仲四郎	勸左衛門
空穂猿		清兵衛	惣大夫
藤永	市十郎	友之進	孫兵衛
ふくの神		金右衛門	久兵衛
祝言	十右衛門	清兵衛	善八郎
高砂		庄左衛門	五郎兵衛
六浦之時分、御舞台へ御供新左衛門并右近、予、勤之。御刀予持之。御脇指ハ平次郎持之。但御幕際ニ伺候。御供仕様之儀、則以新左衛門被 仰出也。御後見市十郎被 仰付也。御間六七尺斗を置、先市十郎御供仕、其ニ少引下り御左之方ニ御刀持之。			

其次ニ新左衛門并右近御供タリ。桜川之時分ハ、御刀平次郎持之。尤、新左衛門と半弥御供ニ出、御脇指ハ佐々木伊織持之。

今日御能此度御作事奉行相勤之。御馬廻長屋平左衛門、富田四郎兵衛、服部与右衛門、和多田八郎兵衛、斎藤左太郎等、拝見被仰付。且又、御能相済今般御作事出来ニ付、御祝儀旁被下之旨ニて時服ニ宛被下之。此内長屋・富田は御別職・宛相添也。玄蕃、兵部申渡之。

加賀藩の老中らを召しての演能の記事。老中着座の間に面々が揃うと、多賀新左衛門が襖障子を開ける。そこへ綱紀が御出になる。

前日の通達通り、奥村兵部による御能初めの宣言をもって、午前十時二十分頃に始まり、翁付き能6番、半能1番、狂言3番、中人ありの番組で午後六時二十分頃に終了した。綱紀は《六浦》と《桜川》の二番を演じている。《桜川》は綱吉の御前で披露した曲で、今回は筆者・葛巻仲四郎がワキを勤めている。

### 【貞享三年九月七日条】

七日 今曉雨降、辰刻以後快晴。(中略) 来十日御能之事、御足之御灸御痛被遊ニ付、御差延被遊之条、九日ニ御登城御延引被遊由、御恭様へ以御使被仰進也。御使、佐久間市十郎衛門也。且又、老中以下へ右相延候段可申聞旨、玄蕃・兵部江被 仰下之云々。(下略)

同月一日条にて十日と決まった祝儀能は、綱紀が灸治で足を痛めたため延期となった。御恭様(綱紀の養女。前年三月、前田家重臣・長時連に嫁いだ)へ九日の登城延期の旨を、佐久間市十郎を使者として伝える。また、老中へも延期の旨が津田玄蕃・奥村兵部によっ

て通達された。

### 【貞享三年九月十二日条】

十二日 雨降。九時、宝円寺 御参詣。同半過、御還城。

今日八時過、於表御舞台石橋之平均(二三返)有之。玄蕃、兵部、新左衛門、御広間之落縁ニ座して見之。御横目井上久太郎、御舞台之内ニ候ス。尤其役者斗也。所謂、平四郎、笛・長九郎、小鼓・二郎兵衛、大鼓・市丞、太鼓・太左衛門也。

表舞台において《石橋》の平均(ならし)が二度行われた。津田玄蕃・奥村兵部・多賀新左衛門が見物し、舞台には井上久太郎が伺候。

シテは竹田平四郎広富、笛は長九郎(七月廿日条に見える山本長九郎か。京都役者)、小鼓は糟谷次郎兵衛(幸流・京都)、大鼓は加藤市丞(葛野流・金沢)、太鼓は藤本太左衛門(観世流・金沢)。この竹田平四郎の《石橋》は、宝生九郎より相伝されたものである『演劇研究』第41号、貞享三年閏三月十一日条・同年四月二十七日条、参照)。

### 【貞享三年九月十三日条】

十三日 雨降。今日於奥御舞台御稽古御能有之。八時少前より初り、六半時相済。玄蕃、兵部内一人可相残旨被 仰出、兵部伺公。其余皆御近習当番之面々、暨奥御小将之内前髪有之輩斗也。且又、子方相望幼少之面々、十九人参出。

今日之御能、御内々儀ニよて御舞台へ御供ニ罷出輩も袴斗也。

役者ハ麻上下也。

御能組

三輪 平四郎

清兵衛 孫兵衛 惣大夫

太左衛門 長九郎

東北

与平次

市 佑 彦左衛門

作左衛門

菊のはな

金右衛門

柏崎 新左衛門

仲四郎

市 佑 佐々木伊織

作左衛門

鬼瓦

伊右衛門

梅枝

与平次

孫兵衛 彦左衛門

長九郎

さつまの守

金右衛門

海士

織部

勘左衛門 惣大夫

太左衛門 長九郎

(下略)

午後二時前から午後七時頃まで、奥舞台において稽古能が行なわれた。近習当番の面々と、前髪のある奥御小姓、子方希望の幼少のもの十九人が参集した。多賀新左衛門は〈柏崎〉のシテ、筆者・葛巻仲四郎は〈柏崎〉のワキ、青山織部は〈海士〉のワキを勤めていゝ。シテ役不記は綱紀の所演か。

### 【貞享三年九月十五日条】

十五日 天快晴。(中略)〔前田与十郎儀仕舞も罷成候様ニ被聞召候条、来十八日御能之時分、御相手無之候間、一番相勤可申旨、先 御内意之趣申聞、急ニ候間相聞申敷哉内証可承旨、

玄蕃・兵部へ可申聞旨被仰出、予奉之。則兩人、与十郎へ申聞候処、終ニ拍子方ニ合仕たる儀無之候へ共、其内証より稽古仕何と歟罷勤可申旨、及御請。〕

明々後日、前田与十郎孝行(加賀八家のうち、長種系の第五代)に一番舞うようにとのお達しがあり、その説得役に指名された津田玄蕃・奥村兵部へ葛巻が伝達した。与十郎からは囃子方と合わせたことが無いが何とか稽古し勤めるとの返答があった。

### 【貞享三年九月十六日条】

十六日 天快晴。今夕於奥御舞台御能平均有之。先、鶴亀(市十郎<sup>椅ニテ</sup>、ワキ予)、大仏供養(市十郎<sup>同</sup>、ワキ友之進)、半部〔後ノ出端より切迄。御袴にて〕、次石橋(平四郎<sup>装束にて</sup>。ワキ・万右衛門、笛・長九郎、小・次郎兵衛、大・市丞、太・太左衛門)。右暮已前相済。前田与十郎儀、藤戸ヲ可仕旨、言上之。

奥舞台において平均(ならし)があった。諸橋市十郎が袴にて〈鶴亀〉(ワキ・葛巻仲四郎)、〈大仏供養〉(ワキ・高安友之進〔春藤流・金沢〕、〈半部〉(後の出端から切まで)の三番を勤めた。

その後、竹田平四郎が装束にて〈石橋〉を演じている。九月十二日条の〈石橋〉慣らしの際と囃子方は同じで、今回ワキは春藤万右衛門が勤めた。四月に宝生より相伝の〈石橋〉を重点的に稽古させる様子が窺える。

昨日、急遽、出演が決まった前田与十郎は、〈藤戸〉を演じると言上した。

【貞享三年九月十九日条】

十九日 陰晴不究。今日午刻於奥御舞台御稽古御能有之。横山筑後・前田与十郎・奥村兵部・多賀新左衛門、扱者御近習当番之輩等迄拝見也。且、子方願候幼少之面々廿人斗罷出也。

張良 十左衛門 万右衛門 次郎三郎 金七  
治右衛門 長九郎

八句連歌 金右衛門

東北 勘右衛門 葛巻 平次郎 長左衛門  
惣大夫

藤戸 前田与十郎 友之進 勘左衛門 金七  
二 郎兵衛 長左衛門

あはせ柿 旦兵衛

梅枝 与平次 松田彦左衛門 長九郎  
市 佑

初雪 平四郎 二 郎三郎 金七  
二 郎兵衛 長左衛門

朝比奈 清兵衛

雲雀山 万右衛門 勘左衛門 作左衛門  
治右衛門

盛久 市十郎 友之進 善八郎 長九郎  
惣大夫

右御能六半比相済也。今日万右衛門儀、初而張郎被 仰付候処、宜仕候旨可申聞旨、多賀新左衛門奉にて町御奉行へ被 仰出也。奥舞台にての稽古能の記事。表舞台での能に向けて、念入りな稽古を重ねている。十三日条で決定しなかったのか、子方を希望する幼少の者が二十人ほど参集している。前田与十郎は、申告通り「藤戸」を勤め、春藤万右衛門は今回初めて仰せ付けられた「張良」を

首尾よく勤めた。

【貞享三年九月二十日条】

廿日 四時過、御宮御参詣。表にての御能御日限昨日より明日、六日たるべき旨今日被 仰出也。

綱紀の足負傷により、延期となっていた表舞台での御能興行の日取りが、九月三十日、十月一日、六日のうちのいずれかになることが申し下された。

【貞享三年九月二十七日条】

廿七日 雨降。(中略) 今日於奥御舞台御能ならし有之。半部、海士、大仏供養、猩々等也。御つば折、又ハ後之御出端御装束にて被遊也。半部之次、雲林院有之。仕手新左衛門、脇予也。装束也。御ならし以前、石橋のならし、装束にて被仰付也。役者ハ先日之通也。

今夜六時過、吉田左門茂和妻女死去、産相滞テ也。為予、実ハ姉也。然共、松平故治部康秀養子トして当治部康英方より茂和ニ所令嫁也。行年三十七也。〔予未御城ニ有之処、事絶たる由告来。則至茂和之宅に。悲涙難尽雙袖。〕

奥舞台での慣らしが行なわれた。十六日条と同じメンバーで、竹田平四郎の「石橋」の慣らしが、装束にて先ずあった。その後、「半部・海士・大仏供養・猩々」などの慣らしがあり、筆者・葛巻仲四郎は「雲林院」のワキを勤めた。

また、夜には、御城に出仕中の葛巻のもとに、姉（吉田茂和の妻）の訃報が届いた。



【貞享三年九月二十八日条】

廿八日 天晴。今朝忌中之断書付出之。実ハ姉たりといへども今ハ従弟分也。依之、姉之忌半減十日の忌中たるべきの旨裁許中より申来也。今夜酉后刻、瑞雲禪寺へ葬送、号涼清院蓮心淨紅。

昨日の姉の訃報を受けて、忌中の断り書きを提出する。姉は養子となつた後に嫁いだことから、現在自身は従弟分に当たるため、忌中の日数は十日との通達があつた。

【貞享三年九月三十日条】

卅日 天晴。亥后刻発風、雨降出、雷鳴。(中略) 今日申刻比、稲垣三郎兵衛安根、恒川安左衛門治賢より切紙到来。忌 御免除之旨言達之。

御自分忌 御赦免被成候間明日より可相勤候。  
御能役義者被 仰付間敷候。明七時より参出  
可仕旨被 仰出候条、可被得其意候。以上。

九月卅日 稲垣三郎兵衛 判

恒川安左衛門 判

葛卷仲四郎殿

御剪紙拝見仕候。私忌 御免除被遊候条、  
明日より可致出仕候。御能役義者被  
仰付間敷候、明ヶ七時より参出可仕旨被  
仰出候趣、謹而奉承知忝仕合奉存候。以上。

九月卅日 葛卷仲四郎 判

稲垣三郎兵衛様

恒川安左衛門様

七半時比重而小泉勘十郎・永原治兵衛方より以手紙御用之条早々可致登城旨申来。則出仕、明日御能ニ付、御座敷御仕つらひの事等奉仕之。

明日より出仕せよとの忌明けの通達が届く。十日の忌中のはずが結局二日間であつた。夕方、重ねて書状が届き、翌十月一日に御能興行を控え、座敷の設え等の担当すべき事柄があるため、本日より出仕することになった。忌引が服喪休暇ではなく、死穢を払うための遠慮であることを示す好例。

【貞享三年九月二十八日条】(前条に直接続く追記)

廿八日於奥御舞台御稽古御能有之由

鶴 亀 友進 勘左衛門 太左衛門  
萩大名 清兵衛 二郎兵衛 長九郎

経 正 陸佑 甚左衛門 次郎三郎  
庄左衛門 作左衛門

半 部 甚 助 孫兵衛 長左衛門  
久兵衛

竹 馬 伝五郎

千 寿 平四郎 万右衛門 市 佑 長九郎  
治右衛門

誓願寺 市十郎 与平次 勘左衛門 金 七  
惣大夫 作左衛門

御中入

雲林院 新左衛門

友進 二郎兵衛

太左衛門  
長九郎

〔此所予可相勤旨被 仰付置處、忌中ニ付如此〕

海士

織部 孫兵衛

金七  
長左衛門

かき山ぶし

三佑

車僧 市十郎

作兵衛 市佑

円七  
五郎兵衛

大仏供養

友進 善八郎

作左衛門

樂あみ

金石衛門

項羽 左平次

万右衛門 二郎三郎

円七  
長左衛門

猩々

織部 善八郎

太左衛門  
長九郎

奥舞台にて稽古能の記事。〈半部・雲林院・海士・大仏供養・猩々〉は前日の二十七日の慣らしと同じ演目。葛巻仲四郎は〈雲林院〉のワキを勤めるはずであったが、忌中のため替りに高安友之進（或いは能勢友之進か。元年九月十九日条参照）がこれを勤めた。

【貞享三年九月二十九日】（前条に直接続く）

廿九日 今日御恭様御登城之由。

此両日之事、忌籠罷有二付、其日ノ所ニ不能記也。

明後日の御能見物のため、前日に御恭様が登城された。二十八・二十九日の城中記事は、筆者・葛巻仲四郎が忌中のため、忌明けとなった三十日に両日分をまとめて記している。

【貞享三年十月一日】

一日 従前夜雨降時々風属。今日於表御舞台御能興行。老中暨備後、九郎左衛門、左衛門、主殿、与十郎等江拝見被仰付。御恭様ニも御脇正面より御拝見也。朝五時已前初り六半前相済也。老中等之外ハ公事場奉行松平玄蕃、玉井勘解由、多賀与一右衛門、奏者番岡嶋一郎兵衛、不破彦三、永原権大夫、富田治部左衛門、笹原監物。其外御馬廻御小将之組頭。且又町奉行、御檢奉行、新番午組、両御徒頭、凡御城に相詰頭分以上之輩拝見被仰付也。又一両日以前江戸より吉村宗利罷越ニ付宗利并後藤理兵衛同拝見被仰付。何もふくさ小袖麻上下也。今日従御恭様松重御進上也。則玄蕃を以老中等へ被下之。於其席被下之也。

今日御能被遊時分、御腰物、三番共ニ予可役之旨今朝御直ニ被仰付。但御舞台へ御出前わすれ口より表御小将之内別ニ御腰物持之、并平次郎・半弥内一人、以上兩人罷出拍子方之後ニ候ス。予御跡より持參。同拍子方之後ニ候時ニ最前持出御腰物ハわすれ口より退出、御幕際ニ候ス。又御脇指ハ平次郎・半弥内替々持之、御幕際ニ候。但内ノ方也。梅枝之時、予ニ少引きがり右近御供ニ罷出也。（其間凡三間斗相隔罷出間、予ニ先達而平四郎・市十郎内一人御後見ニ罷出、其二三尺引きがり予罷出也。但梅枝之時ハ御作物〔被〕為入御出ニ付、平四郎、市十郎かきニて罷出。此時御幕より罷出有之。御舞台へ被為入、橋懸へ罷出也。尤如此可仕旨被 仰出ところ也。）

今朝御表へ御出前、於奥御書院老中、備後、九郎左衛門、左衛

門、并主殿・与十郎・備前・筑後等 御目見也。

御中人之時分老中ト備後、九郎左衛門、左衛門、主殿、与十郎、備前ハ於奥御書院御料理被下之。筑後、玄蕃、兵部、新左衛門ハ挨拶ニ可罷出旨被 仰付。同ニ之間御縁がわにて兩人様宛替々御料理被下也。本多木工主殿子、奥村平次郎ハ幼少ニ付、何方にて成とも心安所にてと被 仰出、黒書院之内にて御料理被下由。其外人持并頭分之輩、黒書院。宗利、理兵衛ハ於菊之間御料理被下也。

御能組

放生川 平四郎  
連善十郎

甚助  
連清兵衛  
連甚右衛門

孫兵衛  
治右衛門

金七  
長九郎

夷毘沙門 金右衛門

八 畠 左平次  
連伝十郎 甚左衛門

善八郎  
庄左衛門

五郎兵衛

湯谷 連善十郎 万右衛門  
連七郎兵衛

市之丞  
次郎兵衛

長左衛門

禁野 吉兵衛

柏崎 新左衛門  
与平次

勘左衛門  
惣太夫

作左衛門

梅枝 子方左太郎  
連甚左衛門 作兵衛  
作物平四郎 市十郎

孫兵衛  
彦左衛門

長九郎

御中人

卷絹 市十郎  
連八之丞 七郎兵衛

勘左衛門  
治右衛門

金七  
長左衛門

小督 右近

甚左衛門

次郎三郎  
久兵衛

五郎兵衛

海人 連善十郎  
大臣助三郎

織部

孫兵衛  
惣太夫

金七  
長左衛門

柑子 三十丞  
連善十郎  
連八之丞

友進

紅葉狩 十右衛門  
連善十郎  
連八之丞

次郎三郎  
庄左衛門

長九郎  
作左衛門

石橋 平四郎  
連伝十郎

勘右衛門

市之丞  
次郎兵衛

太左衛門  
長九郎

呉服 陸之丞

清兵衛

善八郎  
惣太夫

円七様  
五郎兵衛

城内表御舞台にて能が催され、老中から頭分に至るまでの家臣一同、一門の恭姫の他、江戸から来沢していた吉村宗利と京から来ていた後藤理兵衛が拝見を許されている。綱紀自身も〈湯谷〉〈梅枝〉〈海人〉の三番で、シテを演じている。ほぼ十一時間の興行。

吉村宗利は姉小路久弘（元禄元年没）であると考えられ（『地下家伝』、有職故実などにも通じていた人物であることが、青地礼幹の著作、『可観小説』から窺える（巻卅六、「吉村宗利・豊田志摩の禁色説」）。後藤理兵衛は金工の後藤悦乗（宝永五年没）。下後藤家に属しており同家は理兵衛の祖父、顕乗の代に、同じく上後藤家の覺乗とともに前田利常に召し抱えられた。当時、理兵衛は上後藤家の演乗と交代で、隔年で京都から下って金沢に滞在していた。

ここでは綱紀出演中の際の指物の取り扱いについて記されている。昌興が綱紀出演中の刀を預かる役となっており、「わすれ口」（切戸

口）を出入り口として舞台上に控えていた。この記事から囃子方や後見、当日勤仕していた者たちの位置関係が読み取れる。こうした綱紀の出演中に刀・脇差を持ち控える役の立ち位置については、当日記の今年度閏三月の演能記事において幾度が言及されており、変遷があるが、ここでは【貞享三年閏三月廿三日条】（『演劇研究』第40号）に見える綱紀の命に準拠しており、今回もやはり逐一綱紀の指示に依り勤仕している。

【貞享三年十月二日】

二日 天晴。昨日御能拝見被 仰付頭分以上之輩為御礼登城云々。昨日開催の能の拝見を許された頭分以上の者たちが、御礼のために登城したことを記す。

【貞享三年十月三日】

三日 天晴。吉村宗利御暇被下之、白銀式枚被下之。且又於奥御書院 御目見。兵部披露之。退出之上於菊之間御縁頼御羽織、別金五枚被下候。則又為御礼兵部誘引ニて罷出。

吉村宗利が金沢を去るにあたって、下賜されたものを記す他、綱紀への拝謁があったことを記す。

【貞享三年十月六日】

六日 天快晴。今日 御恭様御拝見之御能御興行也。於御上段之間 御拝見也。六時過より初り七半時過終ル。今日も老中暨備後、九郎左衛門、主殿等拝見被 仰付。且又御持弓、御持筒、

御先弓、御先筒之頭并御普請、御作事、郡方等之諸奉行、拝見被仰付也。扱又今日当番之諸士於後座拝見之。

御能組

市十郎

久世戸

与平次

市丞

金七

平四郎

七郎兵衛

惣大夫

長右衛門

碓被

七郎兵衛

惣大夫

五郎兵衛

御半部

勘左衛門

孫兵衛

長九郎

かずまふ

金右衛門

金手

長九郎

生駒右近

甚左衛門

勘左衛門

円七

女郎花

甚左衛門

松田喜左衛門

円七

平四郎

甚助

市丞

太左衛門

唐船

甚助

市丞

長左衛門

御中人

甚助

市丞

長左衛門

左平次

作兵衛

勘左衛門

長五郎

雞龍田

作兵衛

庄左衛門

長九郎

御雲雀山

万右衛門

市丞

五郎兵衛

多賀新左衛門

甚助

治右衛門

太左衛門

雲林院

吉兵衛

二郎兵衛

長九郎

本多主殿

清兵衛

孫兵衛

円七

御阿漕

清兵衛

惣大夫

五郎兵衛

御大仏供養

友進

善八郎

作左衛門

よねいち

伝五郎

庄左衛門

作左衛門

市十郎  
乱  
青山織部  
勘左衛門  
治右衛門  
金七  
長左衛門

今日も御腰物役等御舞台江御供之式、同先日(三番共二御刀予役之)。且又御後見、平四郎・市十郎替々勤之。

本多主殿江阿漕御所望之事、一兩日以前被 仰出。横山筑後、主殿到候ハ罷越相達候由也。阿漕相濟於御樂屋 御目見也。但大仏供養ノ初の御出之時御通懸也。

この日は恭姫を筆頭に、老中以下の重臣、奉行らが拝見している他、当日勤仕していた侍も後座にて拝見を許されている。綱紀がシテをとめたのは〈半部〉〈雲雀山〉〈大仏供養〉。〈阿漕〉において本多主殿がシテを演じていたのは、綱紀自身の所望によるという。この日も昌興が綱紀の刀を預かる役目を務めていたことがわかる。

ここで〈雞龍田〉が演じられているが、江戸期には、この曲は金春流での伝授の形跡が見られるものの、宝生流以外のシテ方においては、現行曲と見なされていなかったという(中司由起子「〈鶏龍田〉考」〔日本文学誌要〕七十九巻、平成二十一年三月)。近世の上演記録としては、慶長八年(一六〇三)の下間少進による演能の記録があるほかには、宝永三年(一七〇六)年から正徳三年(一七二三)にかけての鳥取藩と仙台藩の演能記録があるという(同)。この貞享三年の記録も、こうした諸藩での同曲の演能記録の一つとして付け加えることができる。金沢在住の金春流の能役者、波吉左平次がシテを勤めているが、或いは金春から宝生に転じていたか。

### 【貞享三年十月二十一日】

廿一日 時々雨降。今日七時過より於奥御舞台御能御ならし有

之。尤御内々儀也。

葛城 仲四郎 孫兵衛 次郎兵衛 太左衛門  
長九郎

百万 与平次 勘左衛門 惣大夫 作左衛門

富士太鼓 万右衛門 孫兵衛 次郎兵衛 長九郎

右三番脇も装束也。拍子方ハ裏付上下。地謡ハ袴斗也。

俊成忠度 勘左衛門 惣大夫 作左衛門

脇并仕手連之。謡地謡之内より謡也。

来廿七日歟廿九日、且又廿九日歟二日、於奥御舞台御稽古能御興行可被遊之旨にて御能組玄蕃、兵部江被仰下之。但内々御恭様御拝見被遊度旨被 仰上ニ付、廿六日 御登城可被遊候旨被仰遣之由云々。則玄蕃・兵部方より以文御恭様御年寄女中迄相達之云々。

非公式に能の通し稽古が行われたことを記す。次の稽古能についての日時の案についての記載があるが、次の記事から前者の日程となったことがわかる。また、恭姫が拝見を所望し、二十六日の登城が決まるが、ここにも恭姫の能好きだった様子がうかがえる。

### 【貞享三年十月二十六日】

廿六日 雨降。今日 御恭様 御登城被遊也。奥村老岐、頃日氣息相滞。依之為御使野村与三兵衛被遣也。

先日許しを得たとおりに恭姫が能の拝見のために登城したことを

記す記事。

【貞享三年十月二十七日】

廿七日 曇時々俄雨。今日於奥御舞台御能御興行也。御恭様御拝見被遊。六半時分初秉燭之比終。安房、佐渡、伊予并筑後、備前、玄蕃、与十郎、兵部、新左衛門、拝見被仰付。且又当番組頭分以上之輩暨御次廻伺公之面々、当番之分拝見之。

御中人之時分於奥御書院、老中以下九人江御料理被下之、從御恭様被進御口切之御茶被下之。今日老中を初常服也。但御料理被下砌者改麻。尤其余之輩皆以常之服也〔右近、平次郎、半弥并予、内二人直之〕<sup>(上下二上書)</sup>。但御舞台へ御供ニ罷出ニ付、其時ハ麻上下着之。

御能組

御裳濯	左平次	友進	勘左衛門	四郎兵衛
実盛	平四郎	七郎兵衛	次郎三郎	六郎兵衛
昆布柿	金右衛門		庄左衛門	円七
東北	作兵衛	孫兵衛	長九郎	
江口	新左衛門	友進	市之丞	作左衛門
龍田	勘右衛門	勘左衛門	次郎兵衛	太左衛門
御中人				長左衛門

雨月 平四郎

万右衛門

孫兵衛

太左衛門

葛城

仲四郎

市之丞

金七

花折しんぼち

吉兵衛

桜川

与平次

善八郎

作左衛門

鶴飼 市十郎

甚左衛門

二郎三郎

四郎兵衛

船弁慶 右近

甚助

彦三郎

円七

鶴龜

万右衛門

孫兵衛

金七

恭姫、老中らの重臣以下、当番のものまでが拝見する中、能が行われた。非公式のものであったためか、老中以下は平服で参向した。早朝から日が暮れるまで行われ、綱紀は〈東北〉〈龍田〉〈葛城〉〈桜川〉〈鶴龜〉に出演した。市十郎や左平次といった加賀在住のお抱え能役者のみならず、京都在住のお抱え能役者竹田平四郎がシテ役を演じている他、生駒右近や多賀新左衛門といった家臣もシテを勤めている。

【貞享三年十月二十八日】

廿八日 天快晴。明日も御能御興行可有之旨、最前被 仰出之処、御延被遊旨、今日被 仰出也。  
十月二十一日の記事中にあった予定が変更され、二十九日の稽古能が中止になったことを記す。

【貞享三年十一月一日条】

一日 曇。(中略) 明日御能之儀、今日寒氣甚候ニ付、天氣も宜ケ間敷候条、四日歟六日ニ可有 御興行旨被 仰出也。次条を参照。これも寒氣のための延期である。稽古自体が行われたかどうかは不明である。

【貞享三年十一月五日条】

(前略)

明日之御能之事、先此度者御延引可被成旨被 仰出也。

十月二十八日に予定されていた催能が、寒さが厳しいため延び延びになっている様子が記される。一日に四日か六日に延期、ということになっていたが、三日には初雪も降り、六日の開催もさらに見送られることになった。

【貞享三年十一月十八日条】

十八日 雪降。鶴御披之事、弥可為廿一二日之内候。且又御能可被 仰付之旨被 仰出。追付廿五日ニ可被 仰付哉被 仰出也。

十一月六日に江戸から御鷹の鶴を拝領した知らせが届いたが、その鶴の披露の日取りがようやく決定される。

【貞享三年十一月二十一日条】

廿一日 晴 今日、御口切之御茶被召上。御下ヲ大年寄中并老中等江被下也。且又去年於江戸被召上呂記之四季花鳥図之御掛

物御見せ被遊、〔於奥書院也。則〕御料理被下之。先何も罷通段々候御、聞召 御出被遊。御会釈有テ被為入。且又御酒之上ニ備前御使ニ罷出也。

右着座ハ安房、佐渡、伊予、筑後、玄蕃、因幡也。備前、対馬、新左衛門并玉井勘解由、挨拶ニ伺公也。右畢而同席ニて備前、対馬、新左衛門并勘解由、御料理被下之也。御料理之内被 御出被遊也。畢而又今日御振廻之奉行藤田平兵衛、有賀甚六郎、小泉勘十郎并永原治兵衛儀、於御膳所 御料理被下御茶之粉被下也。(後略)

口切の茶事、席次・次第などの記録。この席で、去年江戸で求められたという「呂記之四季花鳥図」が披露されている。「呂記」は明時代の宮廷画家、呂紀(一四二九―一五〇五)で、室町時代以降日本でも高い人気を誇り、島津家伝来の「四季花鳥図」が東京国立博物館に所蔵されている。右の掛物との関係は不明だが、前田家と縁のある呂紀筆の作品としては、高岡市の瑞龍寺に「絹本花鳥図」が伝わる。

【貞享三年十一月二十五日条】

廿五日 雪時々降。今度御拝領之鶴御披也。式日御目見之輩、登 城也。五半已前、大広間御出座。御先立前田対馬也。御腰物、予役之。御広間二之間ニ右登城之面々群居。御囲之外御左之方ニ(御縁類之方也) 安房、佐渡、伊予、九郎左衛門。御右之方(竹之間之方也)、筑後、玄蕃、因幡着座。御間之襖障子、備前ト対馬双方へ明之。一統御目見也。則今日之御礼之儀、安

房披露。畢而襖障子をたつ。於是御能初也。尤翁無之ニ付、御能初御使無之。

御座間御左之方大廊下ニ安房、佐渡、伊予、九郎左衛門、筑後、玄蕃、因幡、備前、対馬、新左衛門并玉井勘解由、其外御近習之面々、同諸役人、御次番等同公也。御右之方ニ村井出雲、小幡宮内已下人持并諸組頭、諸物頭等同公也。

御能四番済御中入也。表御居間御出座鶴御頂戴被遊。安房、佐渡、伊与、九郎左衛門被召出之。長速<sup>長</sup>速<sup>速</sup>裏間御縁類ニ伺公。御相伴タリ。但御汁迄。御八寸ニ戴出之。四人之輩も同断也。御頂戴畢而安房以下へ御会釈有て被為入。於是四人之面々長速<sup>速</sup>裏之間之内へ入。御料理出、御酒之上ニ御出被遊也。筑後・玄蕃等七人之面々者奥御書院にて御料理被下之也。但安房以下御饗応之内、兩三人為挨拶伺公候也。

人持并諸頭等者於大広間御料理被下之。御使ニ大年寄中出席之由。

今日、御広間御座所ハ勿論、二三之間も同被掛翠簾、右御料理之内垂之。

備後・左衛門ハ依病氣不能登城。

今日頭分以上ハ熨斗目、平侍之分ハ常服ニ麻上下也。御能及薄暮相済也。

御能組

平四郎 室 君 万右衛門 次郎三郎 太左衛門  
すへ広 金右衛門 治右衛門 長九郎

陸佑 宗 論 清兵衛 善七門 五郎兵衛

平四郎 芭蕉 甚助 市佑 長左衛門

市十郎 邯鄲 友進 孫兵衛 金九郎

御中人 勘右衛門 治右衛門 長左衛門

左平次 三井寺 市十郎 市佑 長左衛門

市十郎 刈 与平次 市佑 五郎兵衛

ぶあく 吉兵衛 二郎三郎 長九郎

十左衛門 祝言弓八幡 七郎兵衛 二郎三郎 長九郎

今日表御振舞奉行ハ 奥御振舞奉行ハ御近習頭中也。

十八日に日取りが決まった拝領の鶴の披露の記録。能については、翁付きではないため、「御能初御使」が無かったこと、中入りの後、鶴の汁物が出たことなどが注目される。表振舞奉行の名は空欄のまま。

【貞享三年十一月二十六日条】

廿六日 晴。(中略)

今日、一柳監物殿、初而登城也。八半時過也。於小書院 御対



顔也。但先於竹之間暫滯座之後、小書院へ御招也。孔雀之杉戸際へ被參刻、其辺迄御出向被遊也。監物殿老衰故歟、眼聊も不見。依之里見七左衛門、手を引、且着座之内も介添也。監物殿より御太刀馬代進上。奏者披露之。御対顔畢而御料理出、於是被爲入。相伴は永原權大夫也。安房、佐渡、伊与、挨拶ニ伺公也。御引菜被遊且御盃被遊也。其間御囃子有之。

平四郎 高砂 市佑 治右衛門 太左衛門 長左衛門  
市十郎 孫兵衛 二右衛門 長九郎  
江口 左平次 惣右衛門 金七  
狸々 勘大夫 長左衛門

御盃被遊之、御脇指被遊之。佐渡持出。御刀八片山一文字、御脇指ハ備前光以下行本マデ空白。且又監物殿家来三人 御目見。

高峯十郎左衛門 崎田伊織 齊藤主税

右三人一同ニ罷出。披露ハ御目見畢而退出。重而右之次第第二一人宛被召出之。御盃被下之、御脇指被下之也。

来国光三枚 十郎左衛門  
玄蕃授之  
長盛同 伊折  
因幡授之

雲 重同 主税

玄蕃授之 右畢而被爲入。其間ニ監物殿盃、安房伊与へ御指之由。御納之時分又御出座。七半時過監物を□□也。孔雀ノ杉戸之御出候時御出向被遊、御会釈有テ被爲入。御給仕之輩、其外も常服ニ麻上下也。

御飭雪舟之三幅対、立花二瓶、御棚ニ御香炉、且塩屋之御硯也。監物殿爲右之御礼大年寄中、御家老役、若老中宅へ御越候也。寛文五年に改易され、加賀藩で身柄を預かっていた伊予西条藩三代藩主・一柳直興は、本年六月に赦免され、この日初めて金沢城に上り綱紀に面会した。その宴会の記録。盃事の間、高砂・江口・狸々ノの囃子が奏される。高齡の直興は元禄十五年に没するまで金沢で暮らす、丁重な処遇であったことが分かる。

【貞享三年十二月二日条】

二日 朝快晴、四時比より雪降。又時々晴。今日御恭様へ今度御拝領候羈御頂戴之御振舞。且先日御延引之御能被懸御目也。於奥御舞台御興行也。四比より初、七半過相済。

御能組 咸陽宮 十左衛門 万右衛門 次郎三郎 長五郎  
水かけ聲 吉左衛門 二右衛門 甚右衛門  
朝長 平四郎 作兵衛 善八郎 金七  
庄左衛門 九郎兵衛

ぶす 弥市郎

源氏供養 友進 市佑 作左衛門

御中人 久兵衛

道成寺 市十郎 友進 勘左衛門 太左衛門

枕物くるひ 金右衛門 惣大夫 長左衛門

融 新左衛門 甚左衛門 二部三郎 金七

三井寺 勘左衛門 源兵衛 甚右衛門

羅生門 左平次 与平次 彦三郎 金七

千秋楽謡之

今日大年寄中、御家老役、若老中并玉井勘解由、拝見被 仰付、御菓子等被下之。何も麻上下着之。

当番御使番已上之輩并御次廻之面々有候分拝見之。

今日ハ 御恭様御振舞ニ付、御近習頭中、御銀奉行等、麻上下着之也。右近、平次郎、半弥并予、御舞台へ御供ニ出候也。尤

麻上下也。其外当番之輩ハ袴計也。

恭姫へ拝領の鶴を振舞うにあたり、延期されていた能も実施された。能七番、狂言三番の上演で、午前十時頃にはじまり、午後五時過ぎに終了。シテの記載がない曲は、綱紀自身が舞ったものである。シテの竹田平四郎、諸橋市十郎・波吉左平次をはじめとする既

出の京都・金沢の御手役者の他、能の稽古と実演を綱紀に仰せ付かることが増えていた、加賀藩の家臣たちと推測できる名も散見される。《朝長》大鼓の善八郎、《源氏供養》笛の作左衛門、《融》シテの新左衛門は、家臣の小塚善八郎・三東作左衛門（準玄人役者・多賀新左衛門）か。

拝見の面々は麻袴を着用。葛巻昌興をはじめ、生駒右近・葛巻平次郎・山口半弥も麻袴姿で、舞台上の綱紀に御供した。このように、演じることとは別に、御腰物役として昌興ら家臣が舞台に出る例は、本日記中に度々見られる（貞享三年閏三月等参照。『演劇研究』第41号）。

#### 【貞享三年十二月六日条】

六日 雨降。今日於奥御舞台、御能御興行。御恭様懸御目也。五時前初、七半過相済。今日大年寄中并御家老役、若老中、且又長九郎左衛門、横山左衛門、本多主殿、奥村平次郎、御能拝見被 仰付也。玉井勘解由是又所被 召加也。横山筑後、先依所勞不能登城也。大年寄中三人、九郎左衛門、左衛門、主殿、於奥書院御料理被下之也。

今日も当番頭分以上之輩、御近習、諸役人等当番之面々拝見也。尤惣様常之服也。平次郎、半弥并予ハ替之。御舞台へ御供ニ出ルニよて、其間麻上下着之。

今日天気悪敷に□□書院御敷舞台にて御能可有御興行旨にて、則□□御仕つらひも被 仰付置処、乍雨奥御舞台□□用意也。

和布刈	右近 ツレハ佑	友進	勘左衛門 治右衛門	太左衛門 長左衛門
鶏 聲		弥市郎		
上 俊成忠度	ツレ善十郎	与平次	次郎三郎 惣大夫	作左衛門
井 筒	市十郎	勘右衛門	勘左衛門 彦左衛門	甚右衛門
すはじかみ		吉左衛門		
宋 女	平四郎	七郎兵衛	市右衛門 治右衛門	長左衛門
御中人				
上 富士太鼓	子方助三郎	万右衛門	孫兵衛 次郎兵衛	甚右衛門
鶴 右 近		甚左衛門	喜三郎 庄左衛門	長五郎 五郎兵衛
三人がたわ		金右衛門		
御請能 卒都婆小町	平四郎	友 進	孫兵衛 又兵衛	甚右衛門
同 自然居士	市十郎	万右衛門	市佑 惣大夫	長左衛門
七騎落	左平次	仲四郎	二郎三郎 二郎兵衛	五郎兵衛
	頼朝 助三郎、義実 作兵衛、遠平 陸佑、常陸坊 伝十郎			

雨天の中、奥舞台にて恭姫のための能興行。午前八時前に始まり、午後五時過ぎに終了した。前年の貞享二年（一六八五）三月に、恭姫が嫁した長九郎左衛門時連も拝見を仰せ付かっている。その長九郎左衛門と、横山左門・本多主殿には奥書院にて料理が振る舞われた。

た。十二月二日条と同様に、御手役者に交じり、生駒右近（和布刈）シテ・山東作左衛門（俊成忠度）笛等、家中とみられる面々が上演に加わっている。

拝見する当番や近習の面々は常の服装でよいとのこと。ただし、葛巻昌興・同平次郎・山口半弥は、舞台への御供のため、その間だけは麻袴を着用した。

この日は天気が悪く、書院の御式舞台で興行すべきとのことで準備が命ぜられていたものの、本文虫損で文意が不明確ながら、結局奥舞台で開催することになったらしい。

能九曲、狂言三曲が上演され、このうち「上」とある（俊成忠度）「富士太鼓」で綱紀がシテを勤めた。〈卒都婆小町〉と〈自然居士〉は恭姫の御請能。〈七騎落〉には立役が多いので、登場人物名で役者が記録されている。

#### 【貞享三年十二月十日条】

十日（今夜、於昌蔵宅稽古左之通也。

善十郎	善十郎	同
咸陽宮	仲四郎	楊貴妃
前ハ善十郎後ハ昌蔵	蟻通	造酒佑
船弁慶	仲四郎	
善十郎	小鍛冶	仲四郎
つば折也。）		但仕手或装束、或

葛巻昌興ら、家臣たちが行った能稽古の様子を記録した記事。〈咸陽宮〉〈蟻通〉〈船弁慶〉〈小鍛冶〉のワキを勤める仲四郎が、筆者の昌興。能の実技習得が必須要件となりつつあった加賀藩の家臣

たちには、こうした自主的な稽古が度々必要だったのだろう。

前場と後場のシテが異なる〈船弁慶〉は、善十郎と昌蔵がそれぞれのシテを勤めている。また、「或装束、或つほ折」との記述により、「壺折」があくまで略式の出で立ちであることがわかる。

### 【貞享三年十二月十六日条】

十六日 晴。昼以後小雨降。平田内匠大允職俊、昨日京都より下着。今日登一城。依仰、職原抄〔所注之十二卷〕献呈之。凡不残惟受一人之秘事悉以注進之云々。殊極秘之事、一卷添進之云々。右之書、筑前、奥村、因幡、奉之。仍付因幡進献之。

平田職俊（内匠大允。通称大匠。）は、元江戸幕府の官史で有職家。延宝九年（一六八一）から加賀藩に仕えた。貞享三年に、北畠親房『職原抄』の注釈書『職原家伝秘録』十三巻を著す。『職原抄』は、官職についての有職故実書。

本記事では、前日に京都から金沢に到着した職俊が、同年成立の『職原家伝秘録』十二巻に秘事の一巻を添え、綱紀に献呈したことが明記され、興味深い。

綱紀蔵書を中心とした前田家の尊経閣文庫には、『職原家伝秘録』十三巻が二組残されている。一方、国立国会図書館・石川県立図書館稼堂文庫・宮内庁書陵部等が所蔵する同書は最多でも十二巻までで、秘事の一巻を欠くものと思われる。

なお青地礼幹『可観小説』後編卷第三十六に「平田内匠の職原抄註」として右とほぼ同文が見えるのは、本記を参照したものであるう。